

The Structure and Meaning of Binary Constructions in English (Part II)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 丘 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6736

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



双子構文の構造と意味（その2）

村 上 丘

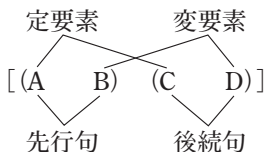
0. 序

英語には、No pain, no gain. のような格言が数多く存在する。この構文は、(i) 2つの構成素が＜並列 (parataxis)＞の関係にあり、言語的に均衡がとれている、(ii) 構成素の配列が＜破格 (anomalous)＞であり、有標の語順である、という特徴を有する。Quirk et al. (1985) はこの構文を＜警句構文 (aphoristic sentence)＞と呼んだが、この名称は上記2つの特徴を想起しない点が難である。村上 (2018) はこの構文を＜双子構文 (binary construction)＞と呼んだが、この名称は上述 (i) の特徴は反映する。本稿においては、その主張を抜本的に改変し、より精密な分析を提示することを試みる。

1. 議論の前提

1-1. 双子構文の特徴

＜双子構文＞は先行句と後続句から構成され、それぞれは＜定要素 (constant)＞と＜変要素 (variable)＞から構成される。＜定要素＞は、句の冒頭に置かれ、比較的安定した言語要素である。一方、＜変要素＞は、句の末尾に置かれ、種々の言語要素に置換される場合がある。＜変要素＞が他の要素に置換された構文は、新規な表現を生成する。これらは、既存の＜格言＞の＜変異形 (variant)＞を形成したり、＜創作ことわざ (anti-proverb)＞を形成する場合がある。双子構文の構造を [(A B) (C D)] と略記すると、次のように図式化することができる。



＜図表 1＞

＜双子構文＞は、個々の句の内部と、句と句との間において、次の条件を満足すると想定する。

句内	句間
(i) 非定形節である。	(v) 言語的に平衡である。
(ii) 有標の語順である。	(vi) 反復、もしくは、対句を構成する。
(iii) 自立できない。	(vii) 種々の結束関係を持つ。
(iv) 命題を構成する。	(viii) 接続詞を含有しない。

＜図表 2＞

1-2. 問題の提起

＜双子構文＞において、＜定要素＞は安定した要素である。村上（2018）はそこに着目し、次の基準を設定して＜双子構文＞の分類を試みた。

(5) a. ＜定要素＞が単一語か複合語か。

b. ＜定要素＞が同一的か対比的か。

(5a) は、＜定要素＞が一つの語か複数の語から構成されるのかを指す。一方、(5b) は、＜定要素＞が互いに同一語か、語形は異なるが意味的に対比関係（反義語や類義語）にあるのかを指す。これら 2 つの基準に基づけば、＜双子構文＞は、以下の 4 つに分類される。

名称	定要素	具体例
タイプⅠ	同一の単一語句が、各句に反復する	No pain, no gain. Many lords, many laws.
タイプⅡ	同一の複合語句が、各句に反復する	Out of sight, out of mind. So many countries, so many customs.
タイプⅢ	対比的な単一語句が、各句に生起する	Once a devil, always a devil. Today a man, tomorrow a mouse.
タイプⅣ	対比的な複合語句が、各句に生起する	Far from home, near thy harm. The more mischief, the better sport.

＜図表 3＞

次の格言を観察しよう。

(6) a. No pain, no gain.

b. Like father, like son.

c. Easy come, easy go.

<図表3>に従えば, (6) は, 同一の単一定要素が反復するので, すべて<タイプI>に属する。しかし, (6) の表面的な言語要素と, 意味構造における<項>と<述語>との関係は多様である。(6a) の<定要素> no は<単項述語>と認定でき, <述語論理>では「苦難がないならば, 成果もない」と表現できる。(6b) の<定要素> like は, <2項述語>と認定でき, <述語論理>では, 「x が父親に類似するように, y は息子に類似する」と表現できる。この場合, x と y は親子関係にある。(6c) の<定要素> easy は, <命題>を従える<単項述語>と認定でき, <述語論理>では, 「x が容易に接近するなら, x は容易に離反する」と表現することができる。(6) の<意味構造>は, (7) のように表示することができる。網掛けの部分は, <表層構造>として具現する要素を示す。なお, (7b) の<意味構造>は, 前稿における提案を修正した。

- (7) a. Conj ([NO (pain)], [NO (gain)])
 b. Conj ([LIKE (x, father)], [LIKE (y, son)])
 c. Conj ([EASY (COME, x)], [EASY (GO, x)])

(6) の各文はすべて, <タイプI>に属するにもかかわらず, その意味構造は互いに相違する。さらに, 同様の事柄が他のタイプにも当てはまる。この事実は, <図表3>の4分類は粗略であることを意味する。このことは, 以下のようにまとめることができよう。

- (8) a. <双子構文>の<定要素>のみに着目しては, この構文の多様性を把捉することができない。<変要素>もまた, 構文の細分化に関与する。
 b. <定要素>が単一か複合かという形式的区分は, <双子構文>において本質的な差異ではない。

1-3. 提案

1-3-1. 句間の関係

本節では, <図表3>を抜本的に改変することを試みる。すなわち, <定要素>と<変要素>の両者を均等に目配りし, (6) の各文を峻別することをめざす。初めに, 句間の関係を考察しよう。記述の通り, <双子構文>の先行句と後続句との間には, <定要素>が同一的か対比的か, という区分が成立する。それに基づき, <双子構文>を以下の2つに大別しよう。

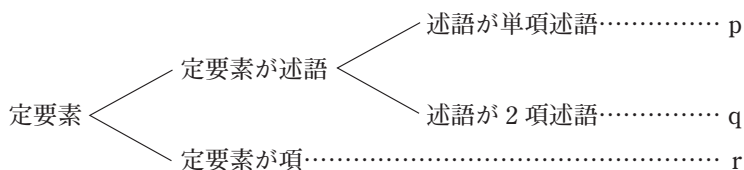
- (9) a. 同一型双子構文 (IBC=Identical Binary Construction)
 b. 対比型双子構文 (CBC=Contrastive Binary Construction)

この区分は、＜双子構文＞全般に容易に適用できる。Many women, many words. の＜定要素＞は many/many という同一語なので、IBC である。一方、Good land, evil way. の＜定要素＞は good/evil という反義語なので、CBC である。本稿では、紙幅の関係上 IBC のみを扱い、続編で CBC を扱う。

1-3-2. 区内の関係

1-3-2-1. 定要素の分類

本稿では、＜表層構造＞における＜定要素＞および＜変要素＞が、＜意味構造＞においてどのような要素に対応するかに着目する。＜述語＞と＜項＞の用語を導入すると、＜定要素＞は、以下のように分類することができる。

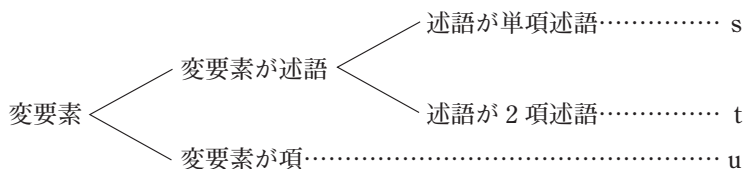


＜図表 4＞

Many women, many words. の＜定要素＞ many は、「～が多い」という意味の＜単項述語＞なので p に対応する。Like father, like son. の場合、＜定要素＞ like は「～は～に類似する」を意味し、2つの項に従える＜2項述語＞に相応するので、q に相当する。Garbage in, Garbage out. では、＜定要素＞ garbage は＜項＞、＜変要素＞ in/out は＜述語＞の役割を演じているので、r に対応する。

1-3-2-2. 変要素の分類

前節で＜主要素＞を分類したのと同じように、＜変要素＞も分類することができる。



＜図表 5＞

Easy come, easy go. の場合、＜変要素＞ come/go は「x が来る」「x が行く」という＜単項述語＞であるので、s に対応する。Little sow, little mow. の＜変要素＞ sow/mow は、それぞれ「x が y を蒔く」「x が y を刈る」という意味で、共に＜2 項述語＞であるので、t に該当する。Many women, many words. の場合、＜変要素＞ women/words は、＜項＞の役割を演ずるので、u に相当する。

1-4. 双子構文の分類

1-4-1. 述語占有型と項述語混合型

1-3.において、＜同一型双子構文（IBC）＞が、＜定要素＞の性質に基づき3 分割され、＜変要素＞の性質に基づき3 分割されると主張した。したがって、IBC は、理論的に9（＝3×3）分類される。この組み合わせを、A～I の記号で表すことにしよう。IBC を i で、CBC を c で表すと、本稿の主題である IBC は iA～iI と表示できる。以上の説明は、次のように表示することができる。

	p	q	r
s	iA	iD	iG
t	iB	iE	iH
u	iC	iF	iI

<図表 6>

上欄に対応する具体例は、以下のとおりである。

iA	Soon hot, soon cold.	iF	Like father, like son.
iB	Safe sow, safe bind.	iG	Garbage in, garbage out
iC	Much coin, much care.	iH	Nothing seek, nothing find.
iD	The more, the better.	iI	観察されない
iE	観察されない		

<図表 7>

上記の分類は、2 大別することができる。

- (10) a. 述語占有型：＜表層構造＞の要素が、＜意味構造＞における＜述語＞に排他的に対応する。
- b. 項述語混合型：＜表層構造＞の要素が、＜意味構造＞の＜述語＞と＜項＞の両方に対応する。

(10a) には, iA, iB, iD, iE が属する。この形式には<意味構造>における<項>が顕現していないので、これらの意味を解釈するためには、不確定の要素を<項>として設定しなければならない。たとえば、Soon hot, soon cold. の場合、<定要素>の soon は<述語>に対応し、<変要素>の hot/cold も<述語>に対応する。その場合、何がすぐに熱くなり、何がすぐに冷めるかは、明示化されていない。<表層構造>として現れた要素は、<意味構造>の述語が占有する。一方、(10b) には、iC, iF, iG, iH が属する。たとえば、Nothing seek, nothing find. の場合、<定要素>の nothing は<項>に対応し、<変要素>の seek/find は<述語>に対応する。<表層構造>として現れた要素は、<意味構造>における<述語>と<項>が混在する。

1-4-2. 体系的空白

<図表 7> には、2つの型 (iE, iG) の事例が存在しない。この事実について考えてみよう。iE 型は、<定要素>が<2項述語>、<変要素>も<2項述語>の場合である。日常言語において、主節も従属節も<2項述語>である事例は、I believe that John loves Mary. など、枚挙にいとまがない。しかし、このような複雑な内容を持つ<命題>を2つ連結し、[(A B)] [(C D)] に収斂することができるであろうか。Although we know that Tom hates Mary, we know that Mary loves Tom. を *Know hates, know loves. と表現することは不可能である。なぜなら、盛り込むべき情報量に比して、表現手段が少なすぎるからである。それは、格言の場合でも同様であろう。したがって、iE はあり得ない形式と想定される。

一方、iI 型は、<定要素>と<変要素>の両者が<項>に対応する。一般に、<命題>は<述語>と<項>から構成される。<気象述語> (rain, snow など) のように、<述語>のみから構成される<命題>は存在するが、<項>のみから構成される<命題>は存在しない。iI 型は論理的にあり得ない組み合わせであり、iI は、<偶然の欠落 (accidental gap)>ではなく、<体系上の欠落 (systematic gap)>であると考えられる。

<図表 6> は、<双子構文>が体系上許される意味と形式の組み合わせの全てを網羅していると考えられる。換言すれば、現存する<双子構文>は、意味と形式との関係を可能な限り追及した表現と言えよう。<述語占有型>は網掛け、<項述語混合型>は四角囲み、存在しないタイプは丸括弧で表示すると、<図表 6> は、以下のように表記することができる。

	p	q	r
s	iA	iD	iG
t	iB	(iE)	iH
u	iC	iF	(iI)

<図表 8>

2. 双子構文の分析

この章では、前章で導入した分類に即し、＜双子構文＞の構造と意味を規定する。初めに、述語占有型の＜双子構文＞を観察しよう。

2-1. 述語占有型

2-1-1. タイプ iA

2-1-1-1. [soon A soon B]

表題の事例は、副詞 soon が＜定要素＞である。

(11) a. Soon hot, soon cold.

b. Soon ripe, soon rotten.

<述語論理>に従うと、(11a) は「x が熱くなるのがすぐなら、x が冷たくなるのもすぐである」、(11b) は「x が実るのがすぐなら、x が腐るのもすぐである」と表現できる。それぞれの＜意味構造>は、次のように規定できる。

(12) a. Conj ([Soon (Hot x)], [Soon (Cold x)])

b. Conj ([Soon (Ripe x)], [Soon (Rotten x)])

<意味構造>における＜項> x は、＜表層構造>に現れない。

2-1-1-2. [First A, first B]

本節では、タイプ iA に属する次の格言を検討する。

(13) First come, first served.

外山 (1984) は、(13) の come が過去分詞であると主張する。確かに、1611 年に公刊された欽定英訳聖書には、When he is come という表現が存在する。しかし、現代英語の母語話者はこの表現を許容しない。現代英語として使用される格言において、本来自動詞である come の過去分詞形を措定するのは妥当であろうか。外山は、以下の前提に基づき、このような結論を下したのであろう。

(14) a. <定要素>同士の統語範疇は等しい。

b. <変要素>同士の統語範疇は等しい。

果たして、この前提は的確であろうか。次の資料を観察しよう。

- (15) a. Danger past, God forgotten.
 b. Once bitten, twice shy.
 c. Soon todd, soon with God.

このうち、(15a,b) は CBC に、(15c) は IBC に属する。(15a) の先行句の＜変要素＞ past は形容詞であるが、後続句の＜変要素＞ forgotten は動詞 forget の過去分詞である。(15b) も同様である。さらに、(15c) の先行句の＜変要素＞ todd (=toothed) は形容詞であるが、後続句の＜変要素＞ with God は前置詞句である。(15) は、2つの＜変要素＞の語類が異なることを示す。したがって、(14b) は擁護できないと帰結することができる。このことは、(14b) に基づく外山の議論は成立しないことを意味する。

本稿では、(13) の come を単純現在と認定する。この利点は、2つある。第一に、(13) の＜変要素＞ come/served は、共に単項述語と認定され、不自然な come の過去分詞形の措定を回避することができる。第二は、他の事例に関わる。(14) に基づけば、外山は、(16) の come を単純現在と認定するであろう

- (16) Easy come, easy go.

このことは、外山の分析では、＜変要素＞の位置に生じる自動詞 come が、格言によって異なる扱いを受けることを含意する。一方、本稿では両者とも単純現在と認定する。すなわち、(13) (16) の意味構造は、以下のように措定できる。

- (17) a. CONJ [(FIRST [COME x]), (FIRST [SERVED x])]
 b. CONJ [(EASY [COME x]), (EASY [GO x])]

すなわち、本論の提案に従えば、格言の＜変要素＞に生ずる come は統一的に扱うことができる。

2-1-1-3. その他の類例

この節においては、タイプ iA に属する他の事例を観察する。＜変要素＞の位置には、以下のように、形容詞あるいは動詞の過去分詞が生起する。これらは、すべて、＜単項述語＞として扱うことができる。

- (18) a. So got, so gone.

b. Ever busy, ever bare.

c. Ill got, ill spent.

(18b) の ever は肯定文で「絶えず」の意味である。連語・成句に使われる形式的表現で、通例は always が使われる。bare は「身にまとう物がない」の意味で、ここでは「貧しい」を表す。(18c) の ill は、「不当に」の意味を持つ副詞である。(18c) の＜意味構造＞は、次のように定式化される。

(19) CONJ [*ILL* [*GOT* *x*]], [*ILL* [*SPENT* *x*]]

参考文献

- 外山滋比古. 1984. 『英語ことわざ集』岩波書店.
 村上 丘. 2018. 「双子構文の構造と意味（その1）」『大妻レビュー』第51号.
 Quirk et al. 1985. A Comprehensive Grammar of the English Language. Longman.